



問題提起

「なぜ今、家族なのか？」

東京大学名誉教授
原島 博



■理想的な家族とは、押しつけられるものではない

原島でございます。今日はこんなに多くの方にお集まりいただきまして、ちょっとびっくりしております。おそらくみなさん、山田太一先生がお目当てだろうと思います。早く山田先生を出せとお思いかもしれませんが、一応コーディネーターとしての役割がありますので、少しばかりおつきあいいただければと思っております。

今回選んだテーマは家族ですが、これはとんでもなく難しいテーマです。なぜ難しいのか。家族は自分で自由に選べるものではありません。子どもは親を選べませんし、親も子を選べません。そして法律的な話は別として、親子関係は解消できません。夫婦関係については、最初は選べるかもしれませんが、これとてそう簡単には解消できません。

家族には、いろいろな縛りがあります。つまり、家族はしがらみとなるのです。これは誰もが思っていることだと思います。父親には家族を養わなければならない義務があり、母親には家事と子育ての負担があります。子どもにとっては、親が有言無言の圧力になっています。そこに嫁姑問題、婿姑問題もあるかもしれません。そして老人介護問題が、今の家族には大きな負担としてのしかかっています。

一方で、人は家族に絆(きずな)を求めています。家族とは、人と人がともに生活する最小単位です。仕事から帰ってきたときの安息、あるいは団欒の場と位置づけている人もいますでしょう。もしかしたら、現代社会の中で家族は孤独を癒す場なのかもしれません。

忘れてはいけないことは、人がそれぞれ違っていいように、家族もそれぞれ違っていいということです。これを忘れて理想的な家族というものを考えると、おかしなことになるとわたしは思っています。理想的な家族をもつことを考えるのはいいことだと思いますが、そ

れは決して他人に押しつけるものではないのです。

今回のこのシンポジウムも、押しつけるつもりはまったくありません。ただし「いろいろあってもいいよ」というのでは、それで終わりになってしまいます。ではなぜ、ここで改めて家族について考える必要があるのでしょうか。ひとつはやはり今、家族というものが大きく変わってきているからです。ここにはいろいろな世代の方がおられると思いますが、家族のとらえ方は世代によって異なるはずで

■家族の問題は、すべての人にとって「自分自身」の問題

戦後、都市化や工業化とともに大家族から核家族へという流れが生まれ、それに伴い、家父長制から「近代家族」へ変わってきました。「近代家族」というのは社会学の専門用語で、「両親と子を構成単位として、子育てを目的とする中で男女の役割分担が行われている」家族のことです。父親は働き、母親は家庭を守るという役割分担が、ある意味、近代の産業社会を支えてきたのではないかとこの点で、「近代家族」と呼ばれます。それがいいことなのか、悪いことなのかはさておき、いずれにしても家族はこのように変わってきました。

単身世帯やシングルマザーも、当然家族に含まれます。“一人”という家族もあります。これは「近代家族」の定義からいえば、厳密には異なるのかもかもしれませんが、わたしは“一人”の家族もあると思っています。さらに夫婦別姓、同性婚など、家族の形は現在進行形でどんどん変わっています。今は家族など必要ないという人も、少しずつ現れてきています。インターネッ



トの世界のコミュニティで十分、子育ては家族単位ではなく共同ですればいい、子どもは遺伝子バンクやデザイナーベビーでつくるなど、そういう考え方の人もいます。

家族についていろいろと議論はありますが、家族の問題は、家族は不要、いらないと考える人にとっても関心事なのです。関心事だからこそ、不要という議論になるわけですね。要するに家族は、すべての人にとって“自分の問題”であるのです。そこで非常に難しいけれど、『これからの家族を考える』というテーマのシンポジウムを企画させていただきました。

今回は、山田太一先生にまずはお話いただき、みなさんと一緒に考えていきたいと思っています。どうぞ山田先生のお話にご期待いただければと思います。どうもありがとうございました。